

第4期札幌文化芸術円卓会議 第1回会議

会 議 要 旨

日 時：平成28年1月26日（火）午後6時30分開会
場 所：札幌市役所本庁舎 地下1階 2号会議室

1. 開 会

○事務局（加茂市民文化課長） 皆様、本日は、大変お忙しい中をお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

ただいまより、第4期札幌市文化芸術円卓会議の第1回目を開催いたします。

私は、本日の司会を務めさせていただきます観光文化局文化部市民文化課長の加茂と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

2. 文化部長挨拶

○事務局（加茂市民文化課長） それではまず、開会に当たりまして、文化部長の川上より、一言、ご挨拶を申し上げます。

○川上文化部長 皆様、こんばんは。

きょうは、大変お忙しい中、また、お寒い中をこの会議にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

また、日ごろから、皆様におかれましては、札幌市の芸術文化行政に対してご協力とご支援をいただいておりますことに、この場を借りて厚く御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

さて、皆様はご存じかもしれませんが、札幌市の文化芸術行政につきましては、札幌市文化芸術振興条例に基づきまして、札幌市文化芸術基本計画を策定しており、平成26年度に改定しましたが、5年スパンの計画としておりまして、これを指針として文化芸術行政のいろいろな事業に取り組んでいるところでございます。

また、文化芸術振興条例の中には、市民、アーティスト、文化芸術に携わる方など、いろいろな方と行政が自由に率直に話し合える場を設けなさいという規定がございまして、その具体的な仕組みとして設けたものが、今回、皆様に委員になっていただいております、この文化芸術円卓会議でございます。

今回は、市民公募から4名の委員、さらには札幌市からの推薦ということで3名の委員、合計7名の委員にお集まりいただいております。本来であれば市長から委嘱状をお渡し申し上げるところですが、今回はお手元に配布させていただきました。ご了承いただければと思います。

また、皆様は既にいろいろな分野でご活躍されておりますが、特に、文化芸術についていろいろな思いをお持ちだと思いますので、今回の円卓会議の中でそういった思いをお話ししていただければと思っております。

さて、本日はまず、事務局から文化芸術円卓会議の概要についてご説明を申し上げた後、今回は、既に皆様から、市民のニーズに應えるわかりやすい文化芸術情報についてということでペーパーをいただいておりますので、これについて各委員からご説明いただくという形になるかと思っております。

今回と次回の2回という非常に少ない回数ではありますが、委員の皆様におかれまして

は、それぞれの立場から忌憚のないご意見をたくさん出していただきまして、本会を盛り
多いものにしていきたいと思っています。

簡単ではございますけれども、開会に当たってのご挨拶とさせていただきます。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

3. 委員の自己紹介

○事務局（加茂市民文化課長） 続きまして、委員の皆様のご紹介ですが、恐れ入ります
が、自己紹介の形式でお願いしたいと思います。

初めての方ばかりだと思いますので、お名前、プロフィール、現在されているお仕事、
過去になさっているお仕事なども含めて自己紹介をしていただきたいと思います。また、
文化芸術活動にこれまでどのように携わってきたか、関心を持ってきたかということも含
めまして、それぞれ2分ぐらいずつでご紹介いただければと思います。

五十音順で、猪熊委員からお願いしたいと思います。

○猪熊委員 皆さん、こんばんは。

私は今、NPO法人札幌オオドリ大学を始めて6年目になります。また、東京資本な
のですが、去年の8月にオープンした株式会社Makers'というものづくりのシェア工
房の2号店が札幌にできまして、その店長をしております。

札幌オオドリ大学は、生涯学習の取り組みをメインにやっている団体です。

ここ5、6年、オオドリ大学をやっていて、札幌市外の方も含めて、多くの方と触れ
合うことができます。オオドリ大学のミッションとしては、受動的な方よりも能動
的な方々をどれくらい増やしていけるかということを実験的にやっていると思っています。
そういう意味では、市民活動という部分でも、文化芸術で市民の方が何か発表するという
面においてもすごく重要ではないかと捉えています。

また、今、Makers'Baseというシェア工房をやっていますが、ものづくりとい
う面で作品をつくったり、ものづくりをなりわいにされている方々が、札幌から一人でも
多く生まれてほしいと純粹に思っておりますので、そこを少しでも担えたらというところ
でやっております。

よろしく願いいたします。

○小野寺委員 こんばんは。小野寺典子と申します。

私は、こちらに書いてありますとおり、合計5校の学校で非常勤講師をしております、
主な学科は福祉医療系です。文化芸術とは全く無縁で、私自身は美術も音楽も全く知識が
ないのですが、いろいろ見に行ったりすることが大好きです。

私の専門は生活学と言いまして、分野としては社会系、家政系の科目です。先ほど申し
上げました福祉医療系で看護学科、介護福祉学科の教壇に立っているのですが、学生
が、日々、必死で勉強しております。若くてエネルギーがいっぱいあって、今は国家試
験に向けて勉強していますが、この後、卒業してからどういう人生を歩んでいくのか、2

50名ほどいる教え子のことを親的な気持ちで心配しておりました。

卒業生が私のところに連絡してきて、ストレスがたまって、もうやりたくない、看護も介護福祉も夜勤が多く、休日は疲れ切って家で寝ているという感じです。そして、実際にやめていく学生も多いです。私のほうで、人生で趣味などはないのかと聞くと、そんなものを見つける時間もなかったということなのです。それは全員ではないと思いますが、同窓会などで私に言ってくる子は、福祉はもういい、疲れ切ったと言っていました。

こんなところで私の年齢を言うのも何ですが、一定の年齢になりましたので、残りの人生は、自分の好きな学校の仕事をまだまだやる気はあるのですが、それが終わった後にはボランティアで文化活動をやりたいという気持ちがあります。その中でまた教え子と出会い、かかわっていききたいという気持ちがあります。

私の教え子から、EXILEのコンサートはすごく楽しかったという話を聞きます。私はEXILEのメンバーの顔もわかりませんが、そういう勉強も含めて、ここで皆様いろいろなことを教わりながら、将来、70歳くらいになったときには、文化にかかわるボランティア活動をして、職場で疲れているような教え子とそこで出会い、「こういう楽しいところで出会えてよかったね」と言える日を夢見ております。

教え子のことと自分のことをただただ考えて、知識が全くないまま応募いたしました。こんな私ですが、ここで一生懸命発言してお役に立てれば大変ありがたく思います。

皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

○カジタ委員 カジタシノブと申します。

名簿に書いてありますが、フリーの者が集まってシェアオフィスを構えています。そこには、主にデザインや映像制作系の人とイベントの企画などをする人が集まっています。

私個人としては、本当に何でも屋に近い状態で、今の話をすれば、劇団のプロデュースだったり、それに付随して役者のコーディネートだったり、ウェブサイトや印刷物などのディレクションのようなことや、企画の広報宣伝、イベントなどを本当にざっくばらんにやっております。

札幌市さんとは、国際芸術祭2014のときに、プロジェクトマネージャーという肩書でかかわらせていただきました。ですから、一個一個をそんなに深く知っているタイプの人間ではなく、全体的に広く浅くという感じでかかわらせていただいています。イベント事となると宣伝なども付随してきますので、そこら辺も含めて全体的にやっていることが多いです。

よろしくお願いいたします。

○川上委員 川上大雅です。こんばんは。

札幌で、salon cojicaというギャラリーと、札幌北商標法律事務所という事務所をやっております。

文化芸術といういろいろなあるのですが、主に現代美術のところがかかわらせていただいております。salon cojicaというギャラリーも現代美術を扱っております。

て、次のアートフェア東京とかART OSAKAといった大きめのアートフェアに出展させていただいていて、アーティストを何とか世の中に出そうということと、外側のアーティストを札幌の人々に紹介しようということをやっております。また、そういう人たちをどのようにサポートしたらいいかということで、法律的な側面と、弁理士もやっておりますので、商標とか著作権というところをトータル的に支えられたらいいなと思って、日々、お仕事をさせていただいております。

昔は作品もつくってました。今は、サポートをする側になっているので、作品はつくってありませんが、手前みそになりますけれども、今、たまたま私の作品が道立近代美術館に出ておりますので、そちらもあわせて見ていただければと思います。

よろしくをお願いします。

○角田委員 皆さん、こんばんは。角田智永と申します。

名簿には会社員と書いていますが、現在、求人情報関係の会社に勤めております。その中でも、ちょっと変わった部署におりまして、メディア企画室というところで、音楽であったり、農業であったり、地域であったり、いろいろなものを応援していくということをしている部署です。

私は、2007年から、北海道のインディーズミュージシャンを応援するプロジェクトにも携わっております。ことしで丸9年になります。ライブなどをウェブサイトで紹介したりということをしています。

それと同時に、ストリートダンスで頑張っている方たちも若者支援の一環で応援しております。

もともとは関連会社にいまして、そこでは、芸術文化を応援しようということで、2004年に入社して、テレビ番組をつくったり、若者を応援するイベントのためのスペースを貸してあげたり、いろいろなことをしていました。

よろしくをお願いします。

○森嶋委員 こんばんは。森嶋拓と申します。

私は、19歳から26歳ぐらいまで、ダンサーとして仕事をしていました。

26歳ぐらいのころに、このままでいいのかということも含めていろいろ考えまして、26歳か27歳ぐらいから、裏方側に移行していきまして、実際に踊る側からイベントを企画したり公演を行ったりという方に回るようになりました。

それと並行して、ホームページをつくることもともと好きだったので、家業の革製品のネットショップも運営していまして、そちらも気づけば10年やっています。

今、昼は会社員としてネットショップを運営しながら、夜はコンテンポラリーダンスと舞踏に特化したダンススタジオを運営しています。

そこは、7人ぐらい集まってやっているのですが、もともとフリーだった人が集まっているので、一般的なダンススタジオにあるような縦関係はなくて、横のつながりで集まってきた、ある意味、シェアスタジオのような感じで運営しています。私は、その中でプロ

デュースやマネジメント担当で、公演の企画や外から北海道に来たいという相談があったときに何とか仕事にしていったり、ダンサーのお金を生むために頭を使うということをしています。

よろしく願いいたします。

○吉田委員 トリになりました吉田です。

まず、私は札幌の新市民です。小樽に生まれ育ったのですが、学生のころからずっと東京におりまして、40年ほどたって、やっと昨年の春にこちらにUターンいたしました。ただ、家族はこちらにおりましたので、年に2回くらいはこちらに来ていましたし、また、30年前に、2年間、札幌ライフを経験したのです。今とは随分違うのですが、一番強く感じるのは、地下鉄やバスにいろいろチラシが張ってありますが、当時は、そのデザインが、本当に情けなくなるほど、ぱっとしなかったのです。東京との差を信じられないほど感じていました。ところが、最近は、すばらしいなと思うくらいよくなっています。

話が前後してしまいますが、私は音楽が中心ですが、美術、建築もいろいろ興味を持っていて、例えば、サッポロファクトリーができたあたりから、札幌は少しずつ変わってきたなと感じていました。今回、資料を送ってもらって、札幌はレベルアップしているということが本当によくわかりました。

そういうことを話していると自己紹介にならなくなるので、ちょっと戻します。

まず、私の仕事ですが、名簿には会社員、翻訳家と書いています。今、北海道で一番ホットなところの一つがニセコですが、海外顧客が別荘を建てたいというときに、現地の設計施工会社との仲介をして、建築プロジェクト管理をするという仕事をしています。なぜそんな仕事をしていたかというと、私は東京にいたときはずっとIT屋です。ITのプロジェクトマネジメントなどをやっていました。そこでプロジェクト管理は相通じるものがありまして、そこでは言葉の問題が必要なものですから、その仕事にもついています。

ですから、音楽あるいは芸術とのかかわりはどこにあるのかといいますと、私は、大学でチェロを始めまして、それからずっとその楽器を弾いていて、室内楽をしていて、こちらではアマオケで行っています。美術も大好きでいろいろなものを見に行くのですが、美術展で東京にいたときに一番おもしろかったと思うのは、芸大の学部生の卒業展と院生の修士の修了展ですね。これが、名画の展覧会と比べものにならないほどおもしろいのです。ユニークなのです。単なる現代アートなんてものではなくて、これほど人がいろいろなものをつくり出せるのかというくらい刺激的でした。そういういろいろな経験をしてきたのですが、本日の資料を見ますと、札幌にもポテンシャルを感じています。

ということで、この会に入れて大変ハッピーです。

○事務局（加茂市民文化課長） どうもありがとうございました。

それでは、事務局のほうもご紹介させていただきます。

川上と私は先ほどご挨拶させていただきましたので、残りは事務局の高橋でございます。

○事務局（高橋調整担当係長） 初めまして。

初めましてではない方もいらっしゃいますが、事務局でメールをお送りしたり電話をさせていただいております高橋と申します。

今回は、2回ということで皆様と接する時間は短いのですが、これを機に、札幌の文化芸術について皆様に忌憚のないご意見をいろいろいただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（加茂市民文化課長） それでは次に、先ほども部長からお話しさせていただきましたが、委員の委嘱状につきまして、大変恐縮ではございますけれども、お手元に資料とともに配付させていただいております。

それから、この円卓会議は公開とさせていただいておりますので、ご理解のほどをよろしくお願いいたします。

それでは、これより、お手元にある次第に沿って会議を進めさせていただきます。

4. 議 事

○事務局（加茂市民文化課長） まずは、これまで、平成21年度に円卓会議を設置しまして、3期にわたり実施してまいりました。今回の4期目は、これまでとやや異なるところもございますので、今回の円卓会議の概要と今後の進め方につきまして、資料をあらかじめお配りさせていただいておりますけれども、その中身の復習ということで、改めてご説明させていただきたいと思っております。

○事務局（高橋調整担当係長） それでは、担当の高橋から、委員の皆様、この円卓会議の概要や今後の進行などについて簡単にご説明させていただきたいと思っております。

まず、事前に送付させていただいております資料の確認です。資料は1から8までであると思いますが、配布漏れや持参し忘れたという方はいらっしゃいませんか。

それでは、早速、円卓会議についてご説明させていただきます。

まず、資料1としてお配りさせていただいております平成27年度札幌文化芸術円卓会議についてと記載しているペーパーを中心に説明させていただきます。

1番目に、札幌文化芸術円卓会議とはと記載しておりますが、そもそも円卓会議とは何かということからです。先ほど文化部長の川上から説明がありましたとおり、資料4としてお配りしております札幌市の文化行政を行う上での基本となる札幌市文化芸術振興条例というものがあありますが、その第10条に、市民、芸術家、文化芸術活動を行う団体等の自由な発想が文化芸術の振興には欠かせないものであることに鑑み、互いに自由かつ率直に意見の交換を行うことができる仕組みの整備を図るという条文がございます。その条文を具体化するための仕組みとしてこの円卓会議が設置されております。そして、ここにイメージ図を載せております。

続きまして、2番目ですが、これまでどういう形でこの会議が開催されてきたのかということですが。

この会議は平成21年度に初めて開催されました。1期約2年で計8回の会議を開催し

まして、この8回の中で、テーマの選定から始めて報告書をまとめるということを経験してきています。

3期の各期の円卓会議からの報告書は資料として配付させていただいております。資料2-1から2-3までになりますが、その中には、例えば芸術の産業化をキーワードに設定して、市民、アーティスト、行政の3者の間で芸術に関する活動を循環させて、札幌を文化芸術のまちにしていくべきだというご意見や、札幌の中心部にアーツセンターという仕組みを整備して、市民やアーティスト、行政のよりどころ、協働する場にするべきだという意見がありました。さらに、創造都市札幌という言葉がございませうけれども、創造都市札幌を現実化していくために、札幌アートをブランド化するとか、アート情報のインフラ整備をしていく必要があるとか、そういうご意見を各期の円卓会議からいただいております。

先ほど加茂の話にもございましたけれども、会議を3クール続けてきた中で、足かけ2年度にわたって約8回の会議という形で開催してきましたが、この形式については、参加を希望される市民委員を中心に、2年で8回もやるのはちょっと厳しいのかなと、門戸を狭めてしまう部分もあるのかなということで、今回は1年度の2回完結の形で実施することにいたしました。

次に、3番目の会議の進行イメージに移ります。

事前に皆様にご意見をいただく書類をお送りさせていただいて、それぞれご意見をいただいておりますけれども、今回はこちらからテーマを設定させていただく形にしております。テーマは、市民のニーズに応える文化芸術情報についてということで、これはお手元に資料としてお配りしております資料3ですが、札幌市では、平成26年度文化芸術意識調査という文化芸術に関する市民アンケートを行っております。

その中で、いろいろなアンケートの設問があったのですが、どうすれば札幌の文化芸術環境に満足できるかという質問を設けたところ、最も多かった回答が、情報がよりわかりやすく提供されるというものでした。そのため、どうすれば市民の皆様のニーズに応える文化芸術情報の提供ができるかということを経験に、今回、市民委員を含む皆様と一緒に議論していくことができると考えました。

ちなみに、次回の第2回目についてですが、きょうは私の説明が終わった後に各委員からご意見の説明をいただくわけですが、それを踏まえた上で、委員の意見を聞いてこういうことを思ったなど、今回の意見を深めていくようなことをしたいと思っています。また、今回のテーマ以外にも、札幌市の文化芸術行政について何か思うことがあるという意見もいただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

お手元の資料1に戻りますが、以上が3番目の会議の進行イメージというところの説明です。

続きまして、4番になります。

皆様からいただきました意見の取り扱いについてです。

これまでの円卓会議でもそうだったのですが、札幌市のホームページ上に円卓会議の議論が公開されておりまして、今回皆様からいただきました意見も市民の皆様にも公表させていただきます。さらに、先ほど条例の話が出てまいりましたけれども、条例の第6条に、文化芸術の振興に関する施策を総合的、計画的にまとめるという規定がございます。そうした規定に基づいて、札幌市では、札幌市文化芸術基本計画というものをつくっているのですが、その計画は5年ごとに見直すことになっておりまして、次期計画の策定に当たって、今回の円卓会議で議論していただいた内容も、次の計画に可能な範囲で反映していくことができると考えております。

あとは、当然、今回議論をいただく中でも、5年後の計画化を待つまでもなく、すぐにも実施できそうなご意見もあるかと思っておりますので、そうしたものは来年度以降の札幌市の文化芸術事業の参考にさせていただきたいと考えております。

最後に5番目のスケジュールです。今回は第1回会議となりますが、次回会議は、皆様からいただいた開催日程表を突き合わせたところ、2月5日がよろしいかと考えておりまして、後で再確認させていただきますが、問題がなければ2月5日に開催していきたいと考えております。

以上が、円卓会議に関する概要説明になりますが、最後に情報提供を一つさせていただきたいと思っております。

資料7をご覧ください。

先ほど述べた札幌市の文化芸術基本計画の中には、さまざまな事業が掲載されているのですが、そうした事業や施策を実施していくことで改善していきたいと考えている成果指標を設定しております。その指標を抜粋したものが資料7ですが、この計画を策定したのは平成26年度だったので、直近となる平成25年度の各指標の数値を現状値として、計画期間である平成30年度までにどの程度改善していけるかという目標値を設定しました。目標値の根拠などは資料としてお配りしております計画書の中に記載しておりますので、後ほどご確認いただきたいと思いますと思っておりますが、そうした指標が各年度でどうなっているかを円卓会議の場で報告させていただくことにしておりますので、この場で簡単に説明させていただきます。

お時間が限られているので一つ一つは説明しませんが、改善された指標も多く、中には網かけになっている部分ですが、既に平成26年度の段階で目標値を達成してしまった指標もある一方で、残念ながら、平成25年度の当初値から後退してしまった指標もございまして、我々としては、こういうものを27年度、28年度とどんどん改善していきたいと考えております。

これらの指標につきましても、ご意見がございましたら次回の会議の後半部分でその他自由意見をいただく時間も設けておりますので、その際にご発言いただければと思います。

それでは、以上が事務局からのご説明になりますが、何かご質問やご意見がございましたらいただきたいと思います。ございませんか。

では、以上となります。

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、前段の説明はこれで終わります、いよいよ本題に入らせていただきたいと思います。

先ほど来、事務局からご説明させていただきましたとおり、今回の円卓会議のテーマは、市民のニーズに応えるわかりやすい文化芸術情報ということで設定させていただきました。委員の皆様には、事前にこのテーマに関してご意見をいただき、それを取りまとめたものを皆様のお手元にお配りしております。皆様からは示唆に富んださまざまなご指摘をいただいております。ただ、文章ではニュアンスがなかなか伝わりにくいところもあると思いますし、ご意見をいただきました意図や背景を口頭にてご説明していただいた方が、ほかの皆様の理解も進むのではないかと考えております。

ということで、皆様のご意見の趣旨を順番にお話しいただきたいと思います。時間はたっぷりありますので、1人5分から10分くらいでお話しいただければと思います。

それでは、五十音順に、猪熊委員から資料をベースに中身のお話をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○猪熊委員 資料8にあるのですが、市民のニーズに応えるわかりやすい文化芸術情報ということを改めて聞きながら、本当に市民だけでいいのかという思いもあるのですが、意見①は、タイムアウトやピーティックスという既存のアプリケーションがありまして、そういうものを使った情報共有が既にあるのではないかと考えています。

どうして思ったかという理由があるのですが、今、Makers'Baseという東京のメンバーとともにやっている事業があるのですが、今、札幌でどんなことをやっているのかという情報を見たいというときに、彼らもなかなか見つけれないでいます。東京であれば、タイムアウトで、この1日にどんなところでどんなイベントをやっているのか、演劇やライブがどこでどのように行われているのかということがカテゴライズされて見られます。しかし、札幌にはそれがまだないということで、ニーズもないのかなということもあると考えております。

ピーティックスというのは、アプリケーションの中でチケットを購入できるものですが、これは主催者に利点があると思っております。オオドオリ大学でも時々使うのですが、先にお金を入金して、コンビニ払いができるので、主催者側はお金などの管理がしやすいのです。そういうものを見ながら、ピーティックスを共有している人たちが札幌でどんなイベントがあるのかを見られると思います。

今、ざっくりと話してしまいましたが、ピーティックスの方も札幌に結構来られていて、札幌でどんな需要があるのかということのリサーチしているところだそうです。横浜市もある部署ではピーティックスを使ってイベント開催をして申し込まれるということもやっています。最近だと、ことし3月にOTO TO TABIという冬の音楽フェスがあるのですが、それはピーティックスを使って来場しやすいように誘導していると言っていました。

ですから、市民のニーズというのは、東京で見た芸大の方の美術展だったり、森美術館で見たようなものを札幌で見るときにどんなところがあるのかということ、いわゆるアマゾンで言う似たものが出てくるというような、今まで触れていなかった演劇や舞台の情報を共有できるということがあるのではないかと考えております。

意見②は、札幌市に対しての問いでして、どのメディアを育てていきたいのかと書いていますけれども、行政となるとみんなというものが当てはまるとは思います、みんなとなると、私たちにとってはすごくわかりにくくて、具体的にどんな人に伝えたいかによって使うものが変わってくると思います。LINEに関して、私は全く触れていないのですが、大学生や高校生はLINEで情報を共有しているということで、10くらい年齢が離れると使うものが違うというところが、難しさでもあり、おもしろさでもあると思うのですが、やっていないことをやるというのはすごくいいと思います。球が来て、打ったことがないところに打ってみるということだと思いますが、どのメディアを育てていきたいのかということが見えたらいいなと思っています。

今、私は、AIR-G'で毎週金曜日の夕方6時から約55分のラジオ番組をやっているのですが、そこでも、アーティスト情報ということで、北海道在住のミュージシャンや作品をつくっている方を音情報として紹介しています。それに対してどれくらいのリアクションがあるかというのはわからないのですが、紹介されたアーティストの方々が、例えばツイッターで、きょうAIR-G'で流れるよという情報が流れていたりしていますので、それが本当にわかりやすい文化芸術情報なのかというのはわかりませんが、興業といえますか、アーティストであったり舞台に立っている方たちがこんなところに載りたいという情報板みたいなものがあればいいなと考えております。もう既にあるのかもしれませんが、そういうものをこの委員の皆さんとも共有しながら、それをモデルケースとして札幌市としてそれをブラッシュアップしていけばいいのではないかと、そういうところも皆さんに意見を聞いてみたいと考えております。

また、先ほど角田委員もおっしゃっていましたが、テレビというところで、サブカルぽい情報番組が深夜帯で結構ありまして、私も好きで結構見ていました。番組がなくなるたびに、あれはよかったよねという話が常々繰り返されています。それもすごく残念だと思っています。NHKの「デザインあ」は、デザインの教育場面が日本にはまだまだないというところで佐藤卓さんが頑張っているらしいですが、何か意思を持ったものを続けていくことで育つ世代というのがあると思うので、教育的だけれども、それでも文化芸術もちゃんと発信している、そして、真面目過ぎずというところがすごく重要ではないかと感じています。

あとは、文化芸術と聞くと、ダンス、演劇、美術作品というものがありますが、私はどちらかというと美術館というイメージがあります。それは人によって違うというのも難しいところだなと思っています。それをうまく、情報を欲しい人は何が欲しいのか、小野寺委員がおっしゃっていたように、何が知りたいのか、何を得たいのかということがなかなか

かわからない人たちも多いと思いますので、若いうちの教育の中から、文化芸術というのは、美術館だけではなくて、演劇やまちのストリートでもダンスがあったりということは今後どのように伝えていくのかということも期待したいと思っております。

以上です。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

アプリとかさまざまなものをもっと広く活用した方がいいのではないかと、それから、メディアですね。行政というのは、紙媒体、テレビ、ラジオというところまでは比較的カバーしていますが、十分ではないところもあるので、さらにフェイスブックなりLINEなりという新しいメディアをどのように使っていくのかですね。どのメディアを使っていくのだと問われると、いろいろな市民がいるので、行政としてはここですと決め打ちしにくいところはあるのですが、さまざまなメディアを行政としても取り入れていく必要があると思います。

続きまして、小野寺委員、よろしく申し上げます。

○小野寺委員 自分で書いていながら忘れたところがあったので、今、読み直していました。

まず、意見①のところ、例としてテレビのことが書いてあったので、すぐに思い浮かんだのがラジオに関してでした。先ほど自己紹介で言いましたように、私の専門は生活学という科目ですが、これは、衣食住や災害、生活リスクを勉強する科目です。学生に授業の中で、ついこの間も浦河沖で地震がありましたけれども、そういうものを授業の中で話すだけではなく、どういうものから情報を得るかということや学生にわかってもらいたいと考えています。そこで、ここの理由のところを書いてあるとおり、ラジオが重要だと思っています。

テレビもそうですが、ラジオは携帯できるものがあって、どこでも持って歩けます。ですから、学生に授業の中で、ラジオを聞いている人がいますかと聞くのですが、40人のクラスの中で1人の手が挙げれば良いという状況です。これは、完全な統計ではなくて、私自身が体感したことです。私もテレビ人間でした。しかし、地デジに切りかわるときに、これはいいチャンスだと思って、テレビをやめまして、ラジオをきょうまでずっと聞き続けて、その中で、テレビならチャンネルをかえたり、ビデオも借りてきたり買ったりして好きなものを見られますけれども、ラジオは、チャンネルを変えることもできますけれども、一つの局をずっと聞き流すことができます。私が行っている美容室もそうにして、同じ放送局のラジオを朝から晩まで聞いているということで、自分の好みだけではなく、自然とその放送局をずっと聞くという生活です。

その体験を学生に話したら、それは考えられないと言われました。21世紀は、みんなパソコンを使います。私は恥ずかしながらパソコンが全くできませんので、この資料も手書きをしまして、担当の高橋さんに入力していただきました。しかし、学校の出席簿管理のために必死で覚えたこともあります。それぐらいアナログ人間で、学校の仕事をよ

くこなしているなど自分でも思っておりますが、見方を変えれば、災害に強いです。スマートフォンなどに頼りませんし、地震が来たらラジオをポケットやリュックに入れておけば、いつもの生活の延長です。災害が起きたときに、急に缶詰を食べたことがない人が食べたなら、食欲がなくなっていくます。ですから、学生には、非常用のリュックをつくって、そこに入れたものを賞味期限が切れる前に捨てないで、とにかく缶詰を食べてください、それで1日か2日過ごしてくださいと。それを日々やっていないと、災害が起きたときに冷たいご飯は喉を通りません。それで健康を害します。

話が外れてしまいましたが、ラジオ生活のおもしろさですね。魅力はないかもしれませんが、一般市民もいろいろなことで工夫をしてやっていただきたいと思っています。ですから、札幌市にも災害センターがありますので、そういうところの情報も含めていくということで、それがなぜ文化芸術に関係があるかと皆さんは思うかもしれませんが、ラジオはいろいろな情報と音楽がすごく多く入ってきます。昔の音楽も新しい音楽もです。美術の情報も入ってきますので、全く関係ないのではなく、ラジオを災害とともに文化芸術の一つの武器として位置づけてやっていただければ、私のような高齢の人、また、今は小学校からパソコン教育が始まっていますが、学齢前の人も取り込めるのではないかと思います。あとは育児で忙しいお母さんですね。そう思いまして、ここに理由を書かせていただきました。

意見②は、車だけで動いている方以外は目にしていると思いますが、公共交通機関での情報提供です。

私は、岩見沢市、恵庭市、栗山町、江別市に通勤で行っていますが、岩見沢市ではスピーカーからの情報をよく耳にします。まちのイベントの情報など、いろいろな情報が絶えず流れてくるのですが、それはとてもいいなと思いました。札幌市でも流れているのを耳にするのですが、PRが多いと思いましたので、こういうものも見直していただければと思います。

また、冬の時期は、タクシーを利用して病院などに行く高齢者がおります。私は、高齢に入るものですから、パソコンではなくても、そういうものをどんどんつくっていただきたいと思います。もちろんお金はかかりますが、ちょっとくらいでしたら費用もそれほどかからないと思いますし、どこかとタイアップしていただければと思ってここに書きました。

意見③は、個人的にはこれがすごく有効で、自分に合っていると思います。

私は、生活学が専門なので、生活があふれているスーパーに、自分の買い物以外にも行って、中を見るということが仕事の準備になります。そのときに、イベントがあると、お年寄りもそうですが、子どもが風船をもらうとか、いろいろなことで喜々としている姿を目にしております。冬より夏が多いですが、こういうところで絵画展やミニコンサートがあれば、みんな買い物に行ったときに触れることができると思います。③のことを札幌市と私たち市民で進められればと思っています。

委員の皆さんの経歴を見まして、私はむしろ社会から孤立しているなと感じました。この場を通して皆さんとお知り合いになれることにとても感謝をしております。そういうことを含めまして、デパートやスーパーで誘致などを行っている方もいますので、PRをしていただきたいと心から思いました。

理由③に関しては、身近に感じるということで、今から10年も前ですが、短期留学でウィーンに行ったことがあります。そのときも結構な年齢だったのですが、文化研修生として3カ月間行ったときに、そこの括弧の中に書いてあることに直面しました。教育関係なので、保育所に見学に行きましたら、すごく大きな声が聞こえまして、保育室をのぞきましたら、オペラ歌手の男性が子どもたちに話しかけているのですが、腹式呼吸で、すごくきれいなドイツ語の発音でびっくりしました。これは特別なことですかと聞いたら、逆にその質問に保育士さんが驚いて、こういうことはしょっちゅうありますし、プロ歌手のお子さんもうちの保育所にもいますということでした。私は、では、プロ歌手のお子さんがある保育所が限定なのですかと聞いたら、特別なことではなくて、ほかの保育園でもやっているというふうに教えていただきました。

いきなり札幌ではできないと思いますが、私が昔の高校生時代に、音楽家が来て、すばらしい演奏をしていったことを記憶しています。ですから、もちろん今もやっていますが、学校での演奏会のようなものの回数をもっとふやすということがあればいいのではないかと思いました。

理由③の説明になっていませんが、留学のときに受けたカルチャーショックのことをお話しさせていただきました。

以降は、皆さんに読んでいただきたいと思いますので、当たり前のことを書かせていただきました。

○事務局（加茂市民文化課長） 媒体としてラジオというご提案がありました。札幌市についても、文化芸術情報に限らず、市の広報としてはテレビとラジオを使っています。話にもありましたように、運転されている方であれば車や、お店でもよくかかっていますので、ビジュアル的に伝えるのは難しいのですが、イベントの告知などの情報提供という部分ではラジオは非常に有用な媒体かと思います。ただ、聞いている若者が少ないのが現実です。

また、今、スマホなどでいろいろな地域のラジオを聞けるアプリを使っている方もいると思います。ラジオを有効に使ったらいいのではないかというお話でございました。

あとは、いろいろなところで芸術文化に触れるということが大事ではないかということでした。例えば、大型商業店の広場でクラシックを演奏するとか、そういうことで芸術文化に触れて、どんどん裾野が広がっていくという好循環をつくっていくことは必要だと考えております。

それでは、開始してから1時間くらいたちましたので、ここで10分ほど小休止したいと思います。

再開後に、カジタ委員から続けてお願いしたいと思います。

[休 憩]

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、再開させていただきます。

引き続き、カジタ委員からお話をお願いします。

○カジタ委員 僕も何を書いていたか覚えていなかったのですが、読み直したのですが、意見①に関しては、猪熊委員と言っていることと近いものがあります。札幌市がやっているものは、広報さっぽろを中心に紙媒体が多いと思います。あとは、マスメディア対応がいろいろあると思います。テレビでの札幌市の広報番組もありますね。また、今はウェブもありますが、一長一短があると思います。紙媒体であれば、文字数の限界がありますし、ウェブではむしろ探すのが難しいということがあります。

受動的と書いていますが、これは僕が宣伝のときによく使う言葉で、紙媒体とかテレビとかラジオというのは、一方的に受けることができます。ですから、ランダムで情報が手に入るのですが、ウェブは調べなければ出てこないの、ユーザーが能動的に使わないと出てこないというところがあります。それぞれに一長一短があり、それぞれに合わせて情報をうまく掲載していったらいいのではないかということです。

札幌市では、大通情報ステーションのウェブサイトなどの網羅的な情報はありますが、あわせて地下歩行空間の札幌ノースプラザや各種サイネージ、ソーシャルネットワークなどもうまく使って、情報のボリューム感のあるウェブサイトと、情報量は少ないけれども、入り口になる紙媒体みたいな感じでうまく分けられればいいのではないかというのが一つ目の意見です。

意見②は、これも猪熊委員とかぶるところがあるのですが、道外に対してもっと取り上げてもらうよう心がけたほうがいいという意見です。道外というのは、国内、海外を含めてですが。ローカルのマスメディアで取り上げられるよりも、全国ネットなどに取り上げられているもののほうが情報の価値が高いと感じる方が多い気がするのです。そう考えると、札幌で発信するというのは、市民に伝えるという意味でいいと思いますが、例えば、テレビであれば全国ネットとか、ウェブサイトであれば、ローカルの情報を扱っているものではなくて、広く扱っているものに対してアプローチをかけていったほうがいいのではないかと思います。そういう意味では、猪熊委員のおっしゃっていたように、アプリケーションもほかの地域も含めてやっているというものをやると、ひっかかりが強くなるので、そういうことをやっていったほうがいいと思いました。

意見③と④に関しては、さらに細かい話になっていきますが、まとめて言うと、イベントをやっている側の発信が弱いのです。これは、札幌市に限った話ではなくて、箱と言われ

るイベントスペースの人やイベント主催者もそうです。

例えば、札幌市であれば、紙媒体はいいのですが、ウェブ媒体に関しては、札幌市の規定がありますね。インターネット 익스プローラーの8に対応していなければいけないというように、もう何年前かという状態に対応しなければいけなくて、ウェブメディアとしての見せる力が圧倒的に弱かったりするのです。

そういう問題もありますし、イベント主催者も、ブッキングライブと言われているものがあります。いろいろなミュージシャンが出るライブやクラブイベントがあるのですが、出演者の名前が羅列されているだけということが結構多いです。あとは、場所と時間だけです。そういうものになると、それを知っている人しか見に行かないという状況になります。

私は、知人たちと一緒にART A l e R T S A P P O R O (アートアラートサッポロ) というイベント情報サイトをやっているのですが、特に出演者しか載っていないような情報は載せられないのです。つまり、一般の人たちに対して、かわりとして告知ができないのです。そういうときに動因となる文章がないというのはそもそもどうなのかという話です。それは、どこにでも言えると思います。

動因の文章に関しては、例えば現代アート系など、特に敷居が高いという印象を与えがちで、そこに翻訳が必要だったりするのです。専門家の言葉もちろん大事ですが、それを一般の人たちに伝えるために翻訳をしてPRするということがより大事ではないかと思っています。

具体的な話をすると、意見②ともかぶりますが、今、北海道文化財団の舞台塾という演劇の広報を一部手伝っています。僕はアドバイザー的にかかわっているので、C I N R A . N e t という文科系を扱うウェブサイトに対してリリースを出したらどうかという提案をしました。ただ、載る気配がなかったので、僕が文章をつくって、これを送ってもらえませんかと言ったら、もう送ったということだったのです。結局、それはニュースリリース文をそのまま送ったのだと思うのです。結果、なしのついでで、僕の書いた文章が2日後に載っているのです。

そういう感じで、発信の仕方や文言一つ変えても届くところには届いていくということがあるので、そういうところは主催者再度やイベントスペース担当者からより強く発信していくべきではないかという意見です。

意見④は、川上委員のところはちょっと違うのですが、そもそもイベントスペースとして、札幌の場合はレンタルスペースが圧倒的に多いのです。つまり、イベントをしたい人が借りて、そこで実施するということが多いのです。ただ、その場合だと、借りてくれた人は頑張って発信するのですが、貸しているスペース側は借りてくれればオーケーなので、そこで発信をしなかったりするのです。場所とのひもづきもなければ、主催者サイドの発信力で全てが決まってしまうのです。

僕も、昔、小さいところのイベントスペースをやっていたのですが、そのときには、か

かわっている者に関しては、スペース側からもひたすら発信をしてお客さんを集めることを常々やっていたので、そういうものをやれば良いと思いつつ、やり方もわからないのです。ですから、これからアートセンターができるのであれば、何らかの方法論を伝えていくということですね。やるやらないは勝手にしろという感じでいいと思うのですが、方法論を伝えていく方法もあるのではないかとということで意見④を別に書きました。

以上です。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

大通情報ステーションという場所を開設して、そこでウェブサイトを立ち上げていますが、これはもう少し上手に使えるのではないかとのご意見だったと思います。また、道外への訴求ですね。これは結構難しく、全国向けにページを買いに行くとお金がかかるし、ニュースバリューとして取り上げていただくところは無料ですが、ニュースバリューとして取り上げていただくだけのものをどういうふうにつくり上げてアピールしていくということは非常に難しいです。過去の私の経験で言うと、雪まつりでプロジェクションマッピングをやったときは、全国ネットで放送されました。あれに実際にお金を払ってやると幾らくらいになるのかなと思いましたが、相当な広告価値があったのだらうと思います。ですから、ああいうものをうまくつくり上げて、全国へのニュースソースに乗せていくということをする、札幌というまちをアピールできるのかなと思っております。

続きまして、川上委員、お願いいたします。

○川上委員 まず、自分のところから話をしていこうと思います。

今回、このお話をいただいたときに、すごく耳が痛くて、知っている人は知っていると思いますが、もしかしたら私のスペースは札幌で一番広報していないところかもしれません。カジタ委員がやっているART A l e R T S A P P O R Oにも、自分からメールを出さないのに、勝手にART A l e R T S A P P O R Oに載せてくれているのです。本来は応募しなければいけないのですが、勝手に気を回して宣伝していただいております。

そのときにいろいろ考えることがありまして、EXILEの話ではないですが、私たちはEXILEになりたいわけではないので、どこまで、やっているよと言うべきなのかというところでいつも悩みます。置くべき会場に置いておいて、知りたい人に探してもらったほうがいいのではないかと考えて、そういうような会場についつい情報を置いてしまいがちになります。でも、それは、自分たちが余り仕事できていないことの言いわけにしているだけではないかということも考えて、その辺りの振れ幅にいつも悩んでいます。

それを踏まえた上で、札幌市がやっただけの文化芸術情報について、意見書の一番上に①から⑤まであるのですが、うちのスペースは、①から⑤は全て使っていません。大通情報ステーションも知ってしまっていて、最初に1回か2回は登録しましたが、やめました。登録が面倒くさいのです。まずは登録して、さらにパンフレットを持って行って、持っていったパンフレットがどれだけ配られているかもよくわかりません。手間に比して得

られる効果が非常に少ないので、気づいたらやめてしまったというのが正直なところではあります。

プレスなども出すときは出すのですが、選んで出すようになっていまして、札幌市関係のプレスは一切出していません。出すとしたら、美術関係のマニアックな、来てほしい人がいるところにピンポイントで出すということをやっていますが、PR TIMESとかお金を出したらばんと100社とかに出してくれるものもありますけれども、そういうものは全部やめました。

そういう形になっていいますが、札幌市に対してどういうものを作ってほしいかということと言わないと円卓会議にならないので、考えてきました。

文化芸術の情報の特徴としては、これからあるイベントや今あるイベントを紹介するだけではなくて、過去にあったものをちゃんと紹介していかなければいけないと思っています。歴史に残していくということが文化の大事な役目として、札幌市としても歴史に残す方法を用意しなければいけないのだと思います。文化芸術というのは、生前に評価されなくても、よくわからないタイミングで、何かのきっかけで急に評価されるということがよくあると思います。そういうものである以上は、そういうときに公開できるものを札幌市としても残しておかなければいけないと思っています。

過去情報を集積して公開することとすごくざっくり書いたのですが、過去の提言にもあったデータベース化はもちろんですし、今だと、大通情報ステーションにせよ、これからの情報しか載っていないのですが、過去の情報をしっかり載せられるようにつくるということです。

また、インターネットが発達してくると、データの海にどんどん埋もれていきますし、消えると情報がなくなってしまうのです。ですから、情報のアーカイブ化がすごく難しくなってきたので、アーカイブのやり方は考えたほうがいいと思っています。

また、意見②になります。私が使わなくなった原因として、施設等紹介の更新を進めることと書きました。半分以上も閉まっている施設の中にわざわざ自分のものを載せてもしょうがないと思って、載せませんでした。それはやってくださいという提案です。

意見③として、批評家集団を育てるプロジェクトの立ち上げと書きました。

札幌市という立場からすると、情報を選んで紹介することがなかなか難しいと思いますが、それであれば、選ぶ人を育ててほしいと思っています。

アートセンターの要綱を見ますと、アートソムリエみたいなことが書かれていました。それも悪くないと思いますし、芸術文化というのは、評価があって初めて成り立っていくものだと思いますので、評価をする人たちをどうやって育てるかということは、ひいては情報をどう伝えるかということに一番直結してくるものだと思います。何々さんが勧めているから行こうというものだと思うので、ブロガーでもいいのしょうけれども、ライトな階層から論文みたいなものまで書く批評家まで、いろいろな階層があると思いますが、そういう人たちをたくさん育てるような事業をやっていただくことが、むしろ文化芸術情報を広げることになるのではないかと思います。

意見としては以上です。

○事務局（加茂市民文化課長） 非常に耳の痛いご意見をたくさんいただいて、我々は反省しなければいけないことがあるなと思いながら聞いていました。

行政は、チラシを置けますよと言うのですが、置く権利だけをつくって、その先の効果があるか、ないかというところまでにはなかなか及びません。これは、我々としては考えていかなければいけないところだと思いますし、ホームページを一回つくったら、つくりっ放しで、メンテをしていない、そんなところに誰が載せるのかというのは、ごもっともなご意見かと思います。非常に反省しながら聞いておりました。

それから、批評家集団の話ですけれども、アーツカウンシルという考え方があります。これは、お金の配分のベースになる審査なり、その後の活動もまた評価するという仕組みですが、行政というのは、これはいい作品、これは悪い作品というふうにはなかなか言えませんし、言うだけの目もありませんので、市民レベルの中で、発信する人材をどのように育成していくかという問題があります。先ほど、アートセンターという話が出ましたけれども、今度は市役所の斜め向かいに劇場ができて、その中にアートセンターもできますので、アーツカウンシルもそうですが、アートマネジメントができる人材を育成していくということが今後必要なのかなと我々も課題として認識しております。

次に、角田委員、お願いします。

○角田委員 私は、ターゲットを絞って、ターゲットに届けやすいものを分けて考えたらどうかという意見です。

若年層にはSNSで、アプリとか、ネットですね。それ以上の年齢の方にはテレビCMがあると思いますし、広報さっぽろも結構見ているのかなという印象がありました。

私が一番思ったのは、札幌市民の方は札幌のことが大好きなのではないかと思います。そのイベントなどにもし自分がかかわっていったら、どんどん口コミしていったり、どんどん拡散していくのではないかと考えています。その自慢のツールはSNSです。

前後してしましますが、次のページに行きまして、どうやって我が子のように思っていただくかということです。市民を巻き込むことは難しいのでしょうか。

案としては、好きなSNSで拡散してくださいということで、選んだ方々にお願いして、ただお願いするのではなくて、勲章ではないですが、今、皆さんがおつけになっているSAPPORO（サッポロスマイル）の特別版のものを上げると、誇らしげになるのではないかと考えました。

前に戻りまして、SNSですが、若い方は動画をよく見るといいますので、動画コンテンツに挑戦してみたらどうかと思いました。札幌市はおもしろいことをやっているなという感じを出せると、若者はすぐに飛びつくと思いますので、そういう提案はどうでしょうか。

以上です。

○事務局（加茂市民文化課長） どんな媒体を有効に活用していくかというご意見だった

と思います。先ほどのイベント盛り上げ隊みたいなものですね。イベントごとにボランティア組織が立ち上がっていき、シティジャズをやるときもボランティア組織があったり、芸術祭をやるときもボランティア組織が立ち上がっています。そこでネットワークを組んで一体的にみんなで盛り上げていかないかという動きもあります。あとは、それをSNSにうまくつなげていくということですね。そうすると、年齢層の問題も出てまいります。年齢の高いボランティアの方はなかなかSNSを上手く使いこなせないということもあるかもしれませんが、その中でも若い方にSNSを使って拡散してくれということも十分考えていけると思います。

そもそも、SAPPORO（サッポロスマイル）というのは、今は文化芸術という範疇でお話をされましたけれども、札幌のまちのことを好きな人がたくさんいるので、みんなで札幌のまちを愛して拡散していきましょう、札幌は笑顔のまちですよというのを広げていきましょうというコンセプトですから、それを文化芸術版でやっていくというイメージなのかと思いながらお話を聞いておりました。

続きまして、森嶋委員、お願いします。

○森嶋委員 森嶋です。よろしくお願いします。

これを見ると、同じことを何度もしつこく書いてしまったかなと思います。

まず、情報や広報はそれぞれ役割があると思うのですが、例えば、テレビCMで流す、ラジオで流す、デパートで流すというのはPR広報になると思いますが、これは興味を持っていない方にも浸透させていく作業ですので、非常に長い時間を必要とするものなのかなと思っております。

一方、市民のニーズに應えるわかりやすい情報というと、もう一つは囲い込みがあると思います。こちらは、狭くターゲットを絞り込んで、その人たちに必要な情報を提供するというので、これはすぐにできることなのかなと感じております。

その中で、大通情報ステーションのウェブサイトは、割とすぐに改善できて、非常に大きな効果を生みやすいのではないかと感じています。現状では、どちらかということ、幅広い方に、こんなものをやっていますという情報を伝えるということですね。先ほど言っていたPR活動に使いやすいような印象を受けています。ただ、ネットというのは、カジタ委員がおっしゃっていたように、自分から探しに行く媒体だと思っておりますので、美術の特集ページなどがあると愛好者が集まりやすくなります。

これは、先ほど話が出た道外へのPR活動で、道外に対しても、こういうものがありますとこっちから言うのは非常に大変です。旅行者に対して、札幌の演劇はどんなものがあるのか。こんなものがありますよと言うのは簡単だと思いますが、さらに多言語で情報を発信できるといいなと思います。私も台湾など外国に行ったときに、せっかくだから、現地のダンスを見てみたいと思うのです。これは、仕事柄で、リサーチという意味合いもあるのですが、台湾へ行ったからクラシックを聞いてみようかという感じには余りならないのではないかと思います。やはり、演劇が好きな方は地元の演劇を見てみたいとか、ダ

ンスが好きな人はダンサーと交流したいということがあると思います。ですから、情報の多言語化は簡単ではないかもしれませんが、海外の方を取り込む視点を持っていけば、ホームページが非常に有意義なものになっていくのではないかと感じています。

あとは、若い人ほど頑固だなと感じることが多いです。例えば、若い方ほど演劇しか見ない、ダンスしか見ないと。ただ、ダンスといっても、フラダンス、レディーダンス、ストリートダンスなどいろいろな種類がありまして、例えばストリートダンスの愛好者はフラダンスをふらっと見に行くということはまずないです。ただ、年配の方のほうが、コンテンポラリーのダンスを見にふらっと来てくれたりするのです。最先端のダンスということで見に来ましたという感じでわくわくして来られて、意外と自分勝手におもしろさを見つけていただいて、あれがよかったとか非常にたくさんの感想を述べたくれたりします。

そういう性質も考慮した上で情報を発信していかなければいけないと思っています。つまり、まずは困り込みをしっかりとするということです。演劇好きとか若い方のスモールコミュニティをしっかりと認めてあげるといいますか、選択できるように、居場所づくりをするということ。その上で、長い広報をするということ。例えば、演劇の人たちにも美術に触れる機会をつくってあげるといいます。若い方も30歳後半になってきたらジャズを聞くようになったということもありますので、その前にジャズという音楽があるということはどこかで知っておいていただく工夫は必要ですから、この両輪といえますか、どちらも大事にしなければいけないと思います。

あとは、コンシェルジュと書いていますが、大通情報ステーションの話に戻すと、今、血が通っていないというか、愛が足りないのかなと感じました。例えば、演劇を紹介したいという人は、演劇愛がすごくあるのです。こういう愛がある人に紹介されると気持ちが動くと思うのですが、ただロボットのように情報が羅列してあるだけだと、お互いの関係が冷え込んでしまうということがあると思います。ですから、各ジャンルに、またこの人かというくらい愛がある方がいるのが理想的だと思いました。

ありがとうございました。

○事務局（加茂市民文化課長） 血の通っていない無機質なサイトというのは、非常に心に響く言葉でございました。やはり、愛を受けとめるには、それなりのキャパシティが必要なのだと思いますので、我々もキャパシティを広げていく努力をしていかなければいけないと思います。

また、コンシェルジュの話は、先ほどの川上委員の話に通ずるところがあると思いますが、そういう専門家といいますが、物をきちんと見られて紹介できる人材をつくっていく必要があるだろうと思います。

それから、多言語化は急務だろうと思います。札幌市として優先しているのは観光情報です。中国語、韓国語はマストかなと思っていますが、それを文化情報の面でも取り入れていくということは必要だろうと思っています。

最後に、吉田委員、お願いします。

○吉田委員 大通情報ステーションは、引っ越す前に旅行で来ていたときに、昔のステーションに行きました。使ったこともあったのですが、住んでいませんので、そんなに使い込んでいませんでした。引っ越してから、あれを使って有益だったことが何度かあったので、それをご紹介します。

夏に、円山公園のグラウンドでやる野外演技があるのですが、私はそれが結構好きでして、ボランティアでチラシをいろいろなところに置いて歩くということを去年やりました。

それだけではなくて、大通情報ステーションに実際に登録しました。写真も含めて、かなり時間がかかりましたけれども、載せました。結果、どうなったかということ、どれが効いたとは一概に言えませんが、一昨年に比べて昨年の夏の動員数はめちゃくちゃ上がりました。それは、チラシをいろいろなところに置いたということもあったと思います。大通情報ステーションに置いたチラシはすぐになくなってしまったので、それなりに見て来た方もいるのかなと思いました。

そのときに気がついたのは、先ほど川上委員がおっしゃられたように、あれをまともに入力するのは大変です。嫌になります。ですから、イベントが多かったら、とてもではないけれども、やっていられません。しかし、逆にみると、あれだけ情報量が多いというのはすごいなと感じました。

そこで、1番目の意見は、これを一つのファンデーションとして、私の場合はクラシック音楽系が好きですが、市内のホールでちゃんとしたホームページを持っていないところがあります。一つ例を言うと、ルーテルホールです。あそこは、とてもいいホールで、イベントの質も非常に高いのですが、残念ながら、ホームページはほとんど機能しておらず、ほとんどチラシでやっています。それで何とかなっているということもありますが、チラシが手に入る方とか、友達が知っているよという方はいいにしても、東京にいて、今度、旅行で行くからルーテルで何かやっているかなと思って探しても全然だめです。そんな運用なんか、とてもできません。でも、例えば、情報ステーションのウェブサイトでセキュリティ管理をして、あなたはこのページを差上げますから、1年間の使用料は幾らで、お好きなようにお使いくださいとしたら、それならやってみようか、最低限の情報だけでも載せようか、チラシだけでもちょっと載せてみようかと思うと思います。そうすると、たちまち、全国どこにいても見られるようになるのです。これは、そういうファンデーションになり得ないかという気がしたのです。

もちろん、それに載せると、イベント自体は、今、情報ステーションに載っていて、隔週の紙は私もよく使っていますが、あそこは簡単に載ってくるので、さらにもっと知りたければウェブに行けばいいのですが、その登録も結構大変だという場合も、ページを貸して、そこにに入れてもらえば、それを一覧に載せていいですよとリンクさせれば、その手間も省けていくというふうに向まく回っていくことができるのではなかろうかというアイデアです。こんなことは、札幌市民の長い方はとっくに考えて、もう諦めたことなのかどうかはわかりませんが、とにかく新市民としてそれを感じたのです。登録量が多いので、逆

にできると思ったのです。つまり、ちんけなウェブサイトではないということがわかったということです。

意見②は、それと近いものがあるのですが、私は、翻訳もやっている関係で典型的な活字人間です。紙媒体が大好きで、東京にいたときも、音楽の情報というと、まずは演奏会に行くとチラシを山ほど渡されます。それを律儀に時系列に全部並べて行って、要る要らないをやっていました。札幌に来てからも同じことをやっています。年間で100回くらいは演奏会に行きます。

ただし、それだけではなくて、やっぱりホームページも使います。先ほどホームページの件もあったのですが、同時に、すごくマイナーな演奏会で、紙でしかできていないものですね。ルーテルもそうですが、東京でもかなり見つけてきたので、こちらに来てから何をやったかという、区民センターのチラシ置場です。あんなものは役に立つのかと思っている方が多いかもしれませんが、私は、あれは結構役に立つということを経験則で知っていました、片っ端から徹底的に読んでいました。そうしたら、宝の山が結構ありました。

その中には、別にそこだけではなくて、ポールタウンのどこかに同じように置いてあるとか、PDF化されてネットにも載っているよというものが結構見つかったのですが、そのコミュニティにしか置いていないチラシも結構あります。そうすると、札幌市内でも1カ所あるいは数カ所しかないの、結局、行かなければわかりません。もし、これがネットで見られるようになっていたら、結構便利なのではないかと感じたものがあったのです。

そこで、意見②は何かというと、そのチラシについて、PDFがあるのだったら載せてもらってもいいし、それがなくてもスキャンして載せるなどですね。そんなことにお金を出して職員がやっていたら大変ですが、ここでふと思ったのは、ボランティアを使えないかということです。例えば、西岡公園に行きますと、すごくいい木のクラフトが置いてあります。すばらしいものが二束三文で売っているのです。皆さんもあそこの公園管理事務所に行ったらわかります。なぜかという、材料費がただで、ボランティアが徹底的に凝ってつくるのです。それが200円とか300円とか、すごく大きい立派なものも500円くらいで売っています。あれが東急ハンズに行ったら3,000円から4,000円はするのではないかと思うようなものです。

ですから、とにかくボランティアは来るわけです。例えば、チラシのスキャンです。そこからキーワードをいろいろくっつけて載せてくださいというアップロードの作業をお願いしたら、これは楽しいということで凝ってやる方が絶対にいると思っています。

これをやることによって一元化されていって、では、どこに載せるかという、大通情報ステーションのウェブサイトのどこかにスペースを設けて、チラシのアーカイブですね。まずは区民センターなら区民センターごとでいいですが、それから、さらに集約されたような場所があって、チラシ情報はそこに行ったら全て検索できて、データとかジャンルなどでひっかかって、何か見られるようになるということですね。ですから、最初のうちは

ぱらぱらでしょうけれども、パイロット的に始めれば、だんだんふえていくのではないかと思います。そうすると、これは結構ばかにならないインフォメーションソースになると感じています。

以上です。

○事務局（加茂市民文化課長） ありがとうございます。

大通情報ステーションのウェブサイトの使い勝手を工夫すれば、もっと幅広い活用ができるのではないかというご意見でした。

それでは、以上で本日予定していた議事については全て終了しました。

次回の会議の進め方についてお話をさせていただきたいと思いますが、まず前半は、本日、委員の皆様からお出しいただいたご意見について、少し深掘りをしていきたいと思えます。

そこで、一つお願いがございます。自分以外の委員の意見の中でご興味があった項目をそれぞれ一つ選んでいただいて、この部分をもっと聞いてみたいということをご質問いただいたり、これは共感できるとか、これはこういう見方があるのではないかということでも何でも構いませんので、これはおもしろいなと思った質問を一つ選んでいただいて、その方にご質問をしていただきたいと思います。我々のほうも聞きたいというものを幾つか用意してまいりますので、それにご回答いただいて、またそれについて意見交換をして膨らませていければいいかなと思っております。

そして、後半は特にテーマを絞らずに、最後のところにある自由に記載していただいた部分について皆様からご発言をいただき、我々も参考にしていきたいと思っております。

今回は、こんな形で進めていきたいと考えております。

次回の会議につきましては、2月5日の金曜日です。時間は18時から開催する予定ですので、よろしく願いいたします。なお、急遽、ご都合が悪くなったなど、支障のある方がいらっしゃいましたら、個別にお知らせをいただければと思っております。

5. 閉 会

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、長時間にわたりまして、大変お疲れさまでございました。

以上をもちまして今回の会議を終了させていただきます。

本日は、まことにありがとうございました。

以 上